

これが本物の潮ラーメン！～個室に通された極上の体験～(全編)

女：紗綾 男：徹也

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

電車を降り、改札を抜ける。

都市部の夕方はまだ陽の余熱を抱いているのに、人波だけは夜の本番みたいに厚い。

制服姿の学生が目につく。肌も声も、存在そのものが発光している。

俺は彼らの軌道から外れた場所へ向かう。もう交わらないルートだ。

駅前のタクシー乗り場を横目にやり過ごし、歩き出す。

国道沿いを直進し、繁華街へ続く脇道へ折れる。

平日のせいか、この通りはまだ覚醒前の街みたいに静かだ。

低いビルの壁面はくすみ、電線は空を編みすぎた糸みたいに錯綜している。駅前の整いすぎた景色とは真逆の顔。

それでも俺は、この街が夜化粧に切り替わる瞬間が好きだった。余計な輪郭は影に溶け、看板だけが妖しく点灯し、街がようやく自分の声で喋り出す。

なのに、俺がこの時間帯にここへ来るのは、最近できた例外ルートのせいだ。いや、例外じゃない。常設になりつつある。

目的地はひとつ。

ラーメン屋

簡素なフォントの看板。暖簾は外気を遮る境界線みたいに揺れている。扉には「未成年者お断り」の札。主張は控えめなのに、意思だけは鋼線みたいに硬い。

最近知った店だ。

入り口横には自販機と灰皿。ここだけ空気の粒度が違う。街の喧騒とも、学生の無垢な光とも馴染まない濃度で満ちている。

俺はポケットの中で手を一度だけ握り、暖簾を見つめた。湯気の匂いがまだ外まで届かない距離なのに、引っ張る力だけは十分だった。

ポケットから煙草を一本。唇に挟み、オイルライターの火輪を指で転がす。紫の線が肺へ落ちる。いつも通りの儀式。今日もブレはない。

ブラックコーヒーを自販機で買う。缶の冷たさが指に残る。

一呼吸で開け、喉へ流す。苦味が舌の地図を塗り替え、歩いてきた疲労を「無効化」しにくる。

「おおー！」

扉の向こうから声が跳ねる。

今日も通常営業。そう思った瞬間、胸の緊張ゲージが勝手に落ちた。

だが、煙草とコーヒーを吸収するピッチは変わらない。

もう最適化されすぎて、疑問を挟む余地すらない。

財布を覗く。二万三千元。十分だ。

煙草を灰皿に落とし、コーヒーの痕跡を飲み切る。暖簾をくぐり、扉を開く。

湿気と匂いが真正面からぶつかってくる。ラーメン屋の空気はいつも、挨拶より先に自己紹介を済ませる。

店内は一見、普通だ。職人気質の店主がひとり。テーブルと椅子。客が四人。

だが、この店の普通は世間の物差しでは測れない。

店主と視線が合う。

「いらっしゃい！」

店主は威勢で空気を切るタイプだ。声が音というより圧で届く。

俺は軽く会釈だけ返す。ここへ来るのは六度目。覚えられている可能性を想定した動作。習慣に近い。

食券機の前に立ち、財布を開く。

初回は驚いた。ラーメン一杯の基礎価格が四千元。

この街の物価でも説明できない跳ね上がり方だったが、俺の目的は別にある。

一万円札を差し込み、八千円の「潮ラーメン」を押す。釣りは二千元。音もなく財布の奥へしまう。ここまでが前奏。

席につく。

その瞬間、視界の重心が店主の背後へ吸われた。

額縁のように並ぶパネル群。

店主の後ろには、綺麗な尻が並んでいるのだ。パネルには若い子からちょっとした熟女までの写真が並んでいる。どれもこれも美人揃いだ。

どの女も陰毛は剃ってある。

この店のメニューは、舌で味わう前に眼で完食する。

そんな錯覚すら抱かせる。

俺は食券をカウンターに置く。

店主は食券を受け取ると、短く確認し、声を放つ。

「潮ラーメン一丁！」

客たちも即座に空気を読み替える。

静から動へ。

ただの飲食店の座標から、風俗店の座標へ書き換わる瞬間。

店主は調理を開始する。

所作は丁寧で、手順は淀みなく、それなのに時間の密度が妙に濃い。

“待たせるための丁寧さ”という概念がこの世にあるなら、今まさにそれを目撃しているのかもしれない。

飲食店の常識はここでは通貨にならない。

この店の価値はスープの中じゃなく、壁面の文脈で完成している。

女性がお尻を出して、上半身は見えず、顔パネルだけの光景。

観賞だけを目的にリピートする常連もいると聞いた。

否定できない。確かに“絶景”としか呼びようがない。

そう。ここはラーメン屋の体裁をまとった風俗店。